

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2006～2008

課題番号：18520013

研究課題名（和文）ライプニッツ哲学における「合理性」概念の検討——その現代的可能性

研究課題名（英文）Study on Rationality in Philosophy of Leibniz——from a contemporary viewpoint

研究代表者 松田 毅 (MATSUDA TSUYOSHI)

神戸大学 人文学研究科教授

研究者番号 70222304

研究成果の概要：

本研究では、ライプニッツの認識論の、個体論、因果性そして確率論に渡る、多様な合理性の構造とその現代的意義とを明らかにすることができた。特に因果性に関する考察では、従来のライプニッツ研究では顧みられることのなかった面を浮き彫りにすることができた。また、確率や統計の問題に関しても、ライプニッツの合理主義の認識論的側面から、その解釈の見通しを与えた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	900,000	0	900,000
2007年度	800,000	240,000	1040,000
2008年度	900,000	270,000	1170,000
年度			
年度			
総計	26,000,000	510,000	31,100,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学 哲学・倫理学

キーワード：西洋哲学

## 1. 研究開始当初の背景

研究開始当初の背景

研究は、ライプニッツ哲学、特にその認識論の全体的構造を解明し、それがもちうる現代的意義とその射程を明らかにすることを目指して始められた。近世初頭のデカルト以来、現代まで続く知識に関する「基礎づけ主義」の哲学運動が、それが内包する原理的難点を露呈し、退潮した後、新たに様々な構想のもとで知識の理論が展開されている現在、現代の基礎づけ主義の哲学のモデルを与えたデカルトや経験主義者およびカントとの間にあり、哲学史上の重要な位置を占めながらも、

主としてその記号学や論理学の構想をあるいは形而上学を中心に研究され、また理解されてきたライプニッツ哲学の中に、実は彼らに優るとも劣らない豊かな認識論の可能性が含まれている点を示すという問題関心が背景にある。

## 2. 研究の目的

研究代表者が2003年に公刊した『ライプニッツの認識論——懐疑主義との対決』で示した、ライプニッツ哲学の認識論的解釈を徹

底・拡大し、20世紀のライプニッツ哲学研究をリードしてきた「論理主義」的ライプニッツ解釈と「力学的」解釈とについて認識論の観点から検討を加え、現代にふさわしい、新たなライプニッツ哲学像を打ち出すことを目指す。その鍵がライプニッツ哲学の内包する「合理性」概念の解明と可能性にあると考え、主に若いライプニッツがパリから帰国した1676年以後の1686年の『形而上学叙説』やアルノー書簡に至る時期のライプニッツのテキスト群を中心に幾つかの問題を吟味・検討する。

### 3. 研究の方法

ライプニッツ哲学研究の現状を踏まえて、以下の三象限からこの問題に接近する道を考える。第1の象限は、特に現代の英米のライプニッツ研究者たちを中心に論争が繰り広げられてきた、ライプニッツの物体論の問題について、物体の経験的認識の合理性をライプニッツの形而上学の中に位置づけることである。第2の象限は、ライプニッツの確率論の試みとそれに関連する研究を通して、蓋然的認識の合理性の位置づけを行うことである。第3の象限は、あらゆる知識の論理的基礎づけを目指す「ライプニッツ・プログラム」の問題である。ライプニッツの知的営みの同時代的・歴史的背景の解明とその遺稿研究を前提に、以上の諸論点の考察を通じて、可能な限り、現代哲学的な観点からライプニッツ哲学の「合理性」の諸相とその連関を解明し、その諸相を哲学的に位置づけ、可能性を考察する。

### 4. 研究成果

(1) 研究の歴史的背景をなすものとして、ある意味では、ライプニッツ以上に「論理主義的」とも言える、スピノザの形而上学とライプニッツのそれとの深い関係が解明された。「普遍学」の構想としての「ライプニッツ・プログラム」——あらゆる知識の演繹を目指す「普遍記号学」とあらゆる概念の定義を行う哲学的百科全書の構想がそこには含まれる——を構想し、それを自らの手で作るうとする過程で、ライプニッツがスピノザの『エチカ』の形而上学の基礎概念の諸定義と対決している様子を子細に検討することは、ライプニッツの認識論の包括する、形而上学、個体論、因果性そして確率論などに渡る、多様な合理性の構造とその現代的意義を明らかにする上でも大いに有効である点を示した。

(2) 一見あまりにも複雑で、またしばしばと

らえどころのないようにも見える、「個体」、因果関係そして事象の生起それぞれに関わる、個性あるいは個性の中にある、「合理性」へのライプニッツの透徹した眼差しと同時にそれらの認識の解明に関連する、ライプニッツ独自の方法に、かれの一連の哲学的考察を貫く理路を見いだすことができる点を示した。またそのような考察のもつ現代的意義も、特に因果性の分析については、マッキーやルイスの仕事との比較をとおして示すことができた。

(3) 因果性の哲学的問題を考察するに当たり、最も基本的な議論が始まるとされる、ヒュームやカントと比べて、その歴史的な前段階と考えられるライプニッツの因果性の考察は、取り立てて大きな現代的意味をもたないと見なされるのが、通常であるが、ライプニッツには因果性に関する優れた哲学的考察と独自の貢献があった点に照明を当て、その意外な現代性を示すことができた。

(4) 1999年に公刊された、ライプニッツの1677年から1690年の哲学関連の遺稿を集めた、アカデミー版全集VI4巻の編集と巻頭のSchaperaによる序論が論争の火種となった、ライプニッツの合理性に関するSchaperaとDascalの間の論争を紹介し、その係争点を踏まえ、「ライプニッツ・プログラム」に代表される「強い合理性」と自然言語の使用を基盤にした、修辞学や法的論証に代表される、「柔らかい合理性」とが、ライプニッツに共存する点をどう理解するべきか、という問題に取り組み、ライプニッツの合理主義をデカルトの「直観主義的合理主義」とスピノザの「必然主義的合理主義」に対する「第三の合理主義」、経験の明証性と論理的整合性の二つの柱を媒介する合理主義として特徴づけることができた。

(5) ライプニッツの確率論に関して、上記の「第三の合理主義」から性格づけを行い、偶然や確率や統計的事象に関するライプニッツの合理主義の認識論的側面を明らかにすることができた。特に、確率論を真理発見法の一部として位置づけ、そこで先行的ないし傾向的な決定論と確率に関する「主観主義」立場とを両立させる方途を示した。つまり、ライプニッツの確率概念が、所与の結果の原因に関する人間的知識の有限性を踏まえ、そこに充足根拠を発見し、そこから結果を確実なものとして、予測し、対応する実践的課題に応えることへの期待から構想されている点を示した。

(6) 総じて言えば、ライプニッツは、論理学

と形而上学だけでなく、自然科学や法学、歴史学などの多様な特性をもった「知識」を獲得・発展させるために必要な、柔軟で包括的な「合理性」概念を追究する中で、デカルトやスピノザが締め出した「知識の不確実性」——蓋然性（「確率」）の領野——を包含する「新しい論理学」、つまり「発見法」を構想した点を確認し、ライプニッツの哲学的営みを支える、このような合理性概念の特徴と射程そして可能性に認識論の観点から迫ることができた。

(7) この研究から以下のような今後の課題を発見することができた。

1. 無限論に関する哲学史のおよび理論的な研究をさらにライプニッツの「普遍学」の一部をなす「定義集」の「フォーマル・オントロジー」的側面に向けて発展させることが今後期待されること。

2. 因果性と確率双方に関連する哲学的考察が行為の法的ないし倫理的責任帰属の根拠づけの問題も視野に入れた研究課題となるので、その面の考察を発展させるべきであること。特に、反事実的条件法分析により解明される「依存関係」として因果関係を論理的に解明しようとし、その複雑な様相に巻き込まれていった、D・ルイスのアプローチとライプニッツの因果性に関する一連の考察をさらに比較する作業を行うことでその手がかりを見いだすことができると期待される。

3. 以上の成果に立ち、ライプニッツ自身も、『形而上学叙説』では、気にかけていた、個体的実体ないしモナド（の絶対的自発性のテーゼ）に関する、日常経験と形而上学の間ギャップにも説得的な架橋を行おうとするライプニッツの思索を解明することが期待される。そのことで物体=身体論にも新しい光を投げかけることができるだろうと思われる。その際、特に原因の結果に対する「過剰決定」や「先回り」と「不作為の原因」などの問題を社会的責任や法と倫理の問題、つまり善の実現であるべき行為——身体は「実体形相」実現の間接的条件となる——の問題に関わる形で検討することが重要であること。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 10 件）

① Tsuyoshi Matsuda, “Leibniz on Causation: From his definition of cause as ‘*coinferens*’ ” *Actas del Congreso de*

*Leibniz, celebrado en Granada.*

(forthcoming) 査読有

② 松田毅、「ライプニッツ的「合理性」をめぐる論争から」『哲学の探求』哲学若手研究者フォーラム、2009年（近刊）、pp25-42 査読無（依頼）

③ Tsuyoshi Matsuda “Towards the Precautionary Human Science——A Case from Japanese Experiences of Environmental Risks—— 『倫理創成研究』2号、2009年、pp.133-146 査読有

④ 松田毅、「二つの個体概念——ライプニッツとスピノザ——」『神戸大学文学部紀要』36号、2009年、pp1-28 査読無

⑤ Masayuki Itoh, Makoto Suemoto, Koji Matsuoka, Atsushi Ito, Kiyomitsu Yui, Tsuyoshi Matsuda, Masanobu Ishikawa, “Contribution of Kobe University to the Regional Centre of Expertise (RCE) on Education for Sustainable Development (ESD) Hyogo-Kobe” *International Journal of Sustainability in Higher Education*. Vol.9.No.4. 2008年、pp479-486 査読有

⑥ 松田毅、「環境リスクの倫理学序説」『倫理創成研究』1号、2008年、pp1-18、査読無

⑦ 松田毅、「法則の偶然性と出来事の偶然性——因果性に関するライプニッツの定義から——」『神戸大学文学部紀要』35号、2008年、pp1-33 査読無

⑧ 松田毅、「ライプニッツの「心の哲学」小論——スピノザ=ダマシオのテーゼ「人間精神は人間身体の観念である」から——」『水声通信』17号、pp80-86 査読無（依頼）

⑨ 松田毅、「環境リスクと合理的意思決定——「インフォームド・コンセント」モデルを手掛かりとして——」『文化學年報』第25号 神戸大学大学院文化学研究科 2006年、pp1-23

査読無

⑩Tsuyoshi Matsuda, “Leibnizsche Traum Argumente und die Frage nach der Realität des Körpers”, *VIII. Internationaler Leibniz-Kongreß, Einheit in der Vielheit, Vorträge* 1. Teil ed. Herbert Breger, Jürgen Herbst und Sven Erdner 2006年、pp580-587 査読有

〔学会発表など〕(計9件)

①松田毅、 「ライブニッツ的「合理性」をめぐって」 哲学若手研究者フォーラム、国立オリンピック記念青少年総合センター、2008年7月20日

②Tsuyoshi Matsuda, “Towards the Precautionary Human Science——A Case from Japanese experiences of environmental risks——” The 38th IIS World Congress Central European University (CEU), Budapes, 2008年6月29日

③Tsuyoshi Matsuda, “Leibniz on Causation : From his definition of cause as ‘*coinferens*’ ” IVth international Conference of Leibniz Society in Spain. Granada. Spain, 2007年11月2日

④Tsuyoshi Matsuda, “Leibnizsche Traum Argumente und die Frage nach der Realität des Körpers” *VIII. Internationaler Leibniz-Kongreß*. Hannover. Germany, 2006年7月27日

(研究会などでの発表)

⑤松田毅、 「ライブニッツ原因概念の現代的意義——D. ルイスの分析を手がかりに」 第3回ライブニッツ研究会、シンポジウム「ライブニッツと現代」、飯田隆、稲岡大志とともに) 神戸大学人文学研究科、2009年3月21日～22日

⑥松田毅、 「二つの個体概念——ライブニツ

ツとスピノザ——」 慶応大学COE招待講演(学習院大学) (第2回ライブニッツ研究会) 2008年3月13日

⑦松田毅、 「因果性に関するライブニッツの考察」 京都哲学史研究会、2007年5月26日

⑧松田毅、 「自然法則の偶然性と「因果性」の分析——ライブニッツの知識論の一視角——」 慶応大学COE招待講演 (第1回ライブニッツ研究会)、2007年3月26日

⑨松田毅、 「科学哲学と倫理学の問題としての『リスクと合理性』」、第13回倫理創成研究会ワークショップ、2006年12月15日

〔図書〕(計3件)

①松田毅、 『ライブニッツを学ぶ人のために』 酒井潔編、「普遍記号法」の箇所の分担執筆、世界思想社、2009年(近刊)

②松田毅、 『哲学の歴史』第5巻『デカルト革命 神・人間・自然』、責任編集小林道夫、共著「ライブニッツ」の箇所の分担執筆、中央公論新社 平成19年、pp516-623, 721-714 768頁

(『哲学の歴史』は、2008年、第62回 毎日出版文化賞特別賞受賞)

(翻訳)

①松田毅、 シュレーダー=フレチェット『環境リスクと合理的意思決定——市民参加の哲学』、監訳、平成19年11月昭和堂(監修、1, 8, 11, 12章および監訳者後書き担当)

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者  
松田 毅 (MATSUDA TSUYOSHI)  
神戸大学 人文学研究科教授  
研究者番号 70222304

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者